

組織の横断的なつながりから生まれる、 みどりの地域協働プラットフォームの提案

一般財団法人世田谷トラストまちづくり
トラストみどり課 トラストみどり担当
菊地 直人

(地域協働 プラットフォーム 自然)

1. 背景

住み慣れた地域で人生の最後を自分らしく暮らすため、地域の包括的な支援やサービスの構築が求められている。誰もが安心して地域で暮らし続けるためのサービスは、公的なものと並行して、住民主体の活動との連携や協働によって生まれる新たなサービスやその基盤からも、創出される必要がある。

2. 事例

世田谷トラストまちづくりが管理・運営をしている、世田谷区立次大夫掘公園内里山農園は、地域住民や障害のある方など、様々な人が分け隔てなく、手作りがかつ楽しく農業に携わることができる、農福連携を目指している。この農園は、様々な主体と一緒に農業を楽しむための仕掛けを施し、異なる属性が横断的につながることによって新しい出会いの場となっている。このことから、みどりの空間を一緒につくりあげていく過程において、包括的に人々がつながっていけるプラットフォームを生み出せるのではないかと考えた。

3. 提案

住民やそこに関わるひとたちが持ち寄った植物からはじまる、みどりの場づくりを行うことによって、それぞれの属性・立場の人が関わりやすさを感じられる居場所を地域に創出することを提案したい。この場づくりに参加することによって、地域の未来をつくっている手ごたえを感じ、「自分ごと」として楽しいと思える活動になるのではないか。地域包括を考えるうえで、様々なステークホルダーを分断させず、むしろ組織が自らつながっていけるような仕組みづくりが、非常に重要である。そのためには、まず一つの組織にとって利益のあることだけでなく、関わっている組織全体で新しく価値を創造することも必要である。さらに、ある程度の公共性が担保され、場が開かれているということも、重要な要素の一つになる。そのことをふまえて、具体的な提案を考えたい。

4. ケーススタディ

提案内容を具体的に考えるために、一つフィールドを設定したい。住宅内で閉じてしまうのではなく、地域との交流機会から高齢者の社会参加を促す、高齢者住宅を対象とする。施設内の外空間に人々が植木鉢やプランターなどを持ち寄ることのできるみどりの空間の管理・運営を世田谷トラストまちづくりが主導して進めることを想定する。今回は、住宅側から直接、場づくりの委託を受けるという形にする。まず、巻き込みたい周辺ステークホルダーの調査とその声掛けを行う。次に、関わる人たちとビジョンを共有する。それぞれの団体にとっての都合ではなく、枠組みを超えて新しい価値をみつけていくことを重要視していく。ワークショップは複数回行い、次第に「自分たちの手でつくっている」という手ご

